

児童の切り方技能の発達—4年から6年までの追跡— 岩手大教育 ○清水 房

目的 きゆうりの切り方技能を年がかりに、小中学校4年生普通学級の児童（男子19名、女子21名計40名）を対象に、5年、6年と追跡調査をし、発達の様相を把握すると共に、それに及ぼす要因のいくつかを解明することによって訓練開始の適時と見出すことである。

方法 調査時期；1979・6・9予備調査。6・14（木）本調査開始から4週間。毎週木曜日15時から16時まで5回実施。翌年は男子18名、女子20名、（男女各1名転出）。7・5、12、14の3回実施。第3年目は1981・6・13から7・4までの4回実施。調査内容；a、実技テストは、きゆうり（直径2～3cm、長さ15cm縦2つ割）を材料として1分間に切った枚数で評価する。b、意識調査は切り方技能と難易・興味・経験の有無との関係。c、手の計測は12部位を計測し、切り方技能との関係とみる。d、包丁の重さ大きさや作業台の高さについても学年段階による意識のちがいを調査する。

結果 1) 学年進行に伴って技能成績は伸びる。特に4年から5年にかけての伸びが大きく、5年から6年にかけての伸びは小さい。2) 各学年共男女間には有意な差は認められない。3) 切り方に対する難易の意識と技能成績との関連は、6年男子においてのみ認められ、他の学年においては認められない。4) 家庭生活経験の有無と技能成績との間には、各学年とも関連は認められない。5) 4年生段階で選んだ包丁を使用して5年、6年と追跡してきたが、6年では使いにくいと答えている。作業台の高さについても殆どの者が低いと意識している。6) 手の計測部位と技能成績との関係は、成長の著しい部位と技能成績間に相関がみとめられる。